

# 高校教育改革の本質と 高校現場の現状

荒瀬克己 大谷大学教授

1953年生まれ。京都市立堀川高校校長、京都市教育委員会教育企画監等を経て、2014年4月より大谷大学文学部教授。2005年以降、中央教育審議会初等中等教育分科会、教育課程部会、キャリア教育・職業教育特別部会、高等学校教育部会、高大接続特別部会、教育課程企画特別部会、高大接続システム改革会議等の委員を歴任。



聞き手  
小林 浩 本誌編集長



高大接続一体改革の中で、高校の教育改革はどう進んでいるのか。

「高等学校基礎学力テスト(仮称)」が話題となっているが、高校教育そのものの中身についても、質の保証・向上を目指して、以下のような観点から具体的な改善や制度的な改革が推進されている(図表1)。

①学習・指導方法の改善と教員の指導力向上 ②教育課程の見直し ③多面的な評価の推進

高校現場経験が豊富なうえ、高大接続システム改革会議ほか中教審各部会で委員を務める荒瀬克己教授に、高校における高大接続改革の内容と、改革に向けた高校現場の状況をうかがった。

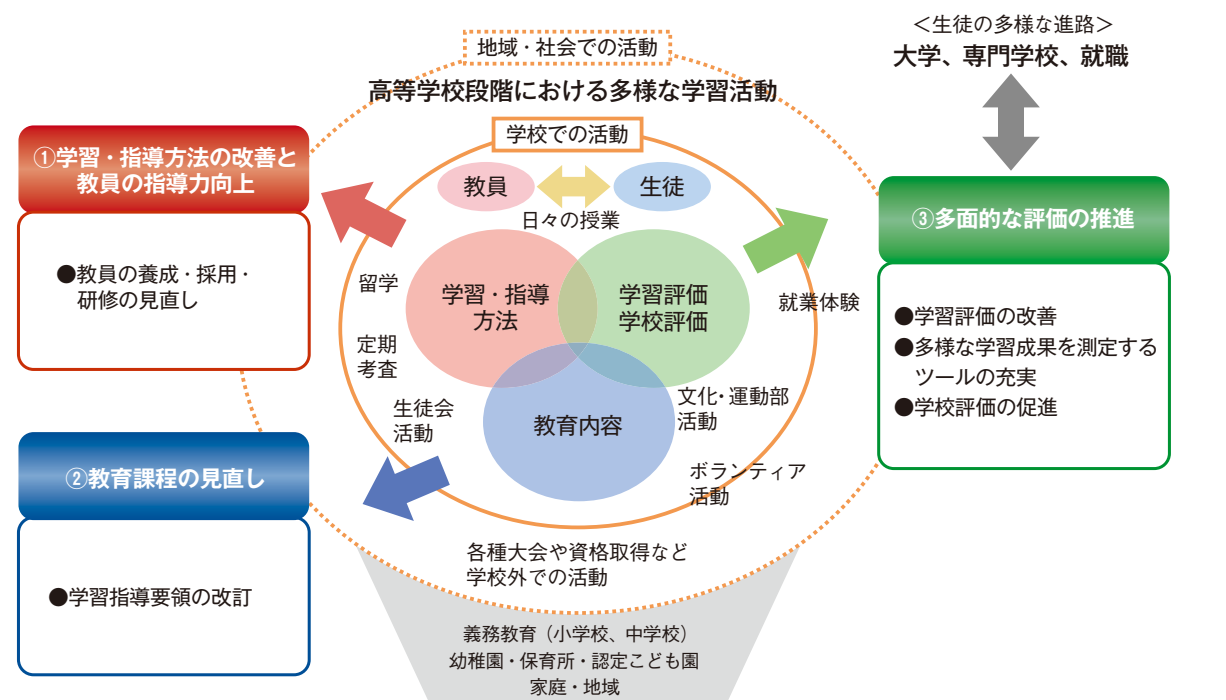
—大学と比べて、高校は学校数が多いうえ生徒のタイプも多様です。そのため改革は進むのか、という声も耳にします。今回の高校教育改革は、現場ではどのように受けとめられているのでしょうか。

これまで、高校では様々な教育改革が行われてきました。ただ、「総合的な学習の時間」にしてもキャリア教育にしても、「生徒にどのような力をつけるのか」といったところが主眼で、我がことではないと感じていた教員も少な

らずいたように思います。

ところが今回の教育改革では、アクティブラーニングの視点からの指導方法の改善等、授業のあり方まで問われています。これは、全教員に関わることでですから、相当なインパクトがありました。そのため、「どうやればいいのか」「本当に意味があるのか」、逆に「これは面白そうだ」という具合に、この話題でもちきりです。都道府県や管理職、教員により温度差はありますが、広く関心が高まっていることは間違いありません。

図表1 高等学校教育の質の確保・向上に向けた全体的な取組について(案)



出典:平成27年9月15日 高大接続システム改革会議「中間まとめ」より編集部にて作成

新しい「学力の3要素」  
高校教育改革の基盤となるのは、

—そうなのです。アクティブラーニング等指導方法の改善については後ほど触れるとして、今回の教育改革では、「学力」を広く捉え直していると思います。先生自身は、「学力」をどのように捉えているのでしょうか。

小林さんや私が委員を務める高大接続システム改革会議は、2015年9月の「中間まとめ」で、高大接続答申(2014年12月)に基づき次のように定義しました。

「十分な知識・技能」  
「それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力」

「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」  
これは、学校教育法第30条第2項で示された、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」という、初等中等教育で重視すべき学力の3要素を踏ま

えて、敷衍したものです。  
さらに、私が委員を務める中教審の教育課程企画特別部会では、2015年8月の「論点整理」において、育成すべき資質・能力の要素として、3つの柱を立てました(図表2)。  
①何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)  
②知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)  
③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(主体性・多様性・協働性、学びに向かう力、人間性等)  
これは次期学習指導要領の根幹をなす考え方であり、学力を相当幅広く捉えた点に特色があります。特に③は、以下のように情意や態度に関わるものまで含まれるとしています。即ち、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考のプロセス等を客観的に捉える力、多様性を尊重する態度と互いの良さを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやり等です。  
学習指導要領の改訂に向け、学力についてしっかり掘り下げたことは非常に重要です。

—先生は、高大接続システム会議の中で「多面的な評価を検討するワーキンググループ」の主査もなさっています。多面的というのは、生徒のそうした幅広い能力まで評価するということでしょうか。

はい。これまであまり評価してこなかった定性的なものを評価するのは至難ですが、そこに取り組んでいこうという方向で議論が進んでいます。もちろん、1点刻みではなく段階別に評価することになるでしょう。

同時に、各科目の評価に当たっては、これまで小中学校と比べ重視されてこなかった観点別評価を高校でも十分活用する必要があるとしています。観点自体も、学力の3要素を踏まえ、「知識及び技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に見直します。これにより、「この生徒は基礎的な知識・理解は十分ではないけれど、手にした力を積極的に使おうとする意欲はある」とか、「関心はあるけれど、技能が不十分だから使えない」といった評価も可能になります。調査書を書くうえでのベースとなる「学習指導要領」についても、観点別学習状況の記載欄を設けるなど、学習指導要領の改訂に伴い、拡充させることを検討しています。

—とはいえ、高校の教員が評価しにくい活動もあると思いますが、そうしたものはどう扱うのでしょうか。

無理に評価する必要はないように思います。ただし、生徒の具体的な活動をきっちりと把握している必要があります。指導要領や調査書には記載できませんが、生徒自身の自己評価を見ることも重要です。各種資格やコンテスト・コンクール等の成績、ボランティア活動、総合的な学習の時間における取り組み、生徒会活動、部活動等について正確に伝え

ることは高校の務めです。どう評価するかは、大学のアドミッションポリシーに関わる問題だと考えています。

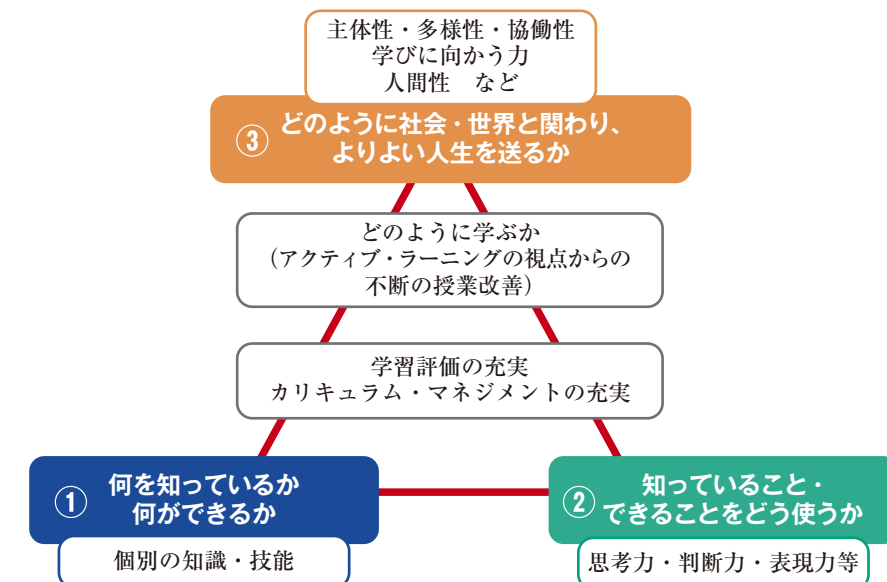
先ほども言いましたように、大学入学者選抜で使われるかどうかはさておき、生徒自身が、「自分の取り組んだこと、考えたことがきちんと評価を受けるのだ」と納得できるのは大切なことです。自己肯定感にも繋がるでしょう。

生徒自身が、自分を振り返り、自分の「いま」と「これから」、つまり、どうありたいのかといった考えをまとめることも重要です。よく聞く話ですが、評定平均値が高いにも拘わらず、指定校推薦の際、大学に提出する志望理由書が十分に書けないという生徒がいます。その大学で何をしたいのかが言葉にできない。思いはあるけれど言語化できないのは訓練すればよいでしょうが、言語化するべきものがないのは、とても不幸です。

そこで私見ですが、全ての高校生がキャリアプランニングする機会を作ってはどうかと思っています。小中学校か

多面的評価を契機に、  
生徒自身が自分について  
深く考える機会を作りたい

図表2 育成すべき資質・能力の三つの柱を踏まえた日本版カリキュラム・デザインのための概念



出典:平成27年8月26日 教育課程企画特別部会における論点整理について(報告) 補足資料

高校・大学を通して  
「生涯にわたり学び続けていく」基盤を  
作ることが、真の高大接続

——高校教育改革に取り組み、  
きて、実感値として改革は進んで  
いると思いますか。

改革が進んでいるかどうかと問  
われれば、進んでいます。しかし、  
まだまだ。また、高校全体が同じ  
歩幅で変わっているかといえば、  
そんなことはありません。いずれ  
にしる、省察的というか、自分達の  
していることを常に振り返る学校  
は、確実に前に進んでいると思  
います。

その際に大切な視点が、学力の3  
要素であり、今回提示した育成す  
べき資質・能力の3つの柱です。「取  
り組みを振り返ったとき、こうし  
た視点が見えていますか。もう一  
度見直してみませんか」という提案だと思っています。

——たびたび話題にあがる学力の3要素ですが、学校教育  
法の30条第2項では、前段に文言があるのですね。

そうです。「基礎的な知識及び技能を習得させるととも  
に、これらを活用して課題を解決するために必要な思考  
力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習  
に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければなら  
ない」というところばかり引用されますが、その前には、「生  
涯にわたり学習する基盤が培われるよう」という文言があり  
ます。ここを見落としてはいけません。学校教育法は、  
初等中等教育に関わる法律ですが、生きるためには学び続  
けなければいけないわけで、高校教育で終わる話ではあり  
ません。生涯にわたり学び続けていくために、今、何をしな  
いといけないのか。それが高校はもちろん、大学にも問わ  
れています。そこをつなぐことが、真の高大接続だと思  
います。

(まとめ/堀水潤一 撮影/有田聡子)

ともあるでしょう。世の中は多様である、ということを実  
際に経験し、その大切さを集団の中で理解していく。そん  
な効果も生じると思います。

——教科横断的に探究的な学びを行う「総合的な学習の時  
間」や、現行の学習指導要領で重要事項にあげられている  
「言語活動の充実」については、現場では狙い通りにいて  
いるのでしょうか。

総合的な学習の時間については、うまくいっていないの  
が実情です。とりわけ進学校を中心に、大学入試に役立た  
ないという見方が根強くあるように感じています。しかし、  
この時間は学びを定着するうえで大きな効果を発揮しま  
すし、結果的に大学進学へのモチベーションにもなります。  
自分たちで課題を設定し、解決していく過程で「面白かつ  
た。もっと続けていきたい」という気持ちになることがあ  
ります。また、分からないものに当たったとき、分からない  
けれどワクワクするということがあります。総合は、そう  
いう時間として力を入れていく必要があります。分からな  
いものに対して向き合う力、分からないけれど、あきらめず  
にやり続ける力、やってみて、面白いかどうか、その意義を  
判断できる力。これは、高校までに身につけておくべき大  
切な力です。

言語活動の充実についても、思考力・判断力・表現力等を  
育成する観点から、引き続き重視する必要があります。相  
手に何か伝えようと言語が必要なので、それは教科・科目を  
問いません。自らの学びを言語化する作業は、  
単なる体験を経験として定着させることです。経験した  
ことは次の学びへとつながります。

大学入試に戻りますが、堀川高校の生徒が、京都大学の  
現代文の問題を読んで「美しい問題」と表現したことがあ  
りました。文章の面白さはもとより、問題を解いていくこ  
とによって文章により深く入り込んでいくことができる、  
と言います。生半可な理解では解けない。でも、設問が読  
解を後押ししてくれる。そうしたことを感じとったよう  
でした。こういう気づきを生むような入試問題こそ本物  
です。高校としては、大学での学びにつながる言語活動に  
についても重視することが必要です。

求められる能力にしても様々です。例えば、独創的なア  
イデアを出すことに秀でたA君B君C君が、それぞれのア  
イデアを出し紛糾していたとします。そこへD君がやって  
きて、3人の話を聞いたうえで、「では、こんな組み合わせはど  
うだろう」と提案し、話がまとまった時、このD君の調整力  
もまたひとつの優れた能力です。できれば、こうした力ま  
できちんと評価できるようにしていきたいのです。

——ありがとうございました。続いて「指導方法の改善」に  
ついておうかがいしたいと思います。冒頭、アクティブラー  
ニングの話題がありましたが、高校での取り組みはうまく  
いっているのでしょうか。

高校現場でも当初、誤解がありました。本来アクティブラー  
ニングとは、知識が定着するとか、学びが深まるとか、  
学習意欲がわくといった目的を持った手法のはずでしたが、  
型と受けとめる先生方が大勢いました。そもそもオー  
ルマイティーな型などなく、ある場面で有効でも、別の場  
面で有効であるとは限りません。そのため今は、型ではなく  
視点が大切だと強調しています。前述した教育課程企画  
特別部会の「論点整理」でも、アクティブラーニングにお  
ける3つの視点を示しています。即ち、

- i) 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発  
見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できて  
いるかどうか。
- ii) 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考  
えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できてい  
るかどうか。
- iii) 子供達が見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学  
習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過  
程が実現できているかどうか。

つまり、深い学び、対話的な学び、主体的な学びの過程が  
実現できているかどうか。教わったことをテストまで記憶  
するだけの学び、閉じた学びからの脱却です。

他者との関わりを深くする中で、例えば、「あいつがいる  
と、すんなりいかないところが面白い」という気づきが生  
まれたり、場合によっては、「いや、よく分からないんだけど」  
と頻りに口にする人物の存在価値が高まったり、というこ

ら積み上げる形で高校に引き継がれ、  
その過程で何度も本人が書き加える。  
これが、大学の合否判定材料になっ  
てもいいのではないかと思います。多  
面的な評価とは少し意味合いが違  
いますが、これからは、評価を受け  
る材料を生徒自らが作ることも大切  
だと思います。

——これまでずっと、点数で測れる狭  
義の学力こそ公平な判断材料だと思  
われてきましたが、今、なぜ、このよ  
うな多面的な評価が必要になってき  
たのでしょうか。

高大接続システム改革会議にお  
いても、「公平な評価は大切だが、果  
たして公正な評価ができていたか  
どうかは分からない」という議論  
がありました。同じ一つの物差しで測  
るという点では公平だったかもしれ  
ないが、その生徒の評価として公  
正だったかどうか、という問題提  
起でした。評価すべき能力はほか  
にもあるのに、点数化しやすいも  
のだけで比べ、みなで納得して  
いたわけです。

生徒主体の指導方法への改善で、  
真の学力を引き出すことを目指して

